

シュライエルマッハーの

信仰論第一版および第二版について

——その成立、構成、内容に関する考察——

高 森

昭

目 次

- 一 はじめに
- 二 信仰論の成立をめぐって
- 三 信仰論の構成について
- 四 信仰論の内容に関して
- 一 はじめに

五 結 論
注

参考文献

付属資料

フリードリッヒ・シュライエルマッハー Friedrich Schleiermacher (一七六八——一八三四年) は、そのベルリン大学在職時代に、再度にわたって組織神学の体系的著作を公けにしている。信仰論の通称によって知られるこの著作を、シュライエルマッハーは一八二一—二三年に第一版を、一八三〇—三一年に第二版を、いずれも二巻の書物とし

シュライエルマッハーの信仰論第一版および第二版について(高森)

て刊行した。その標題が *Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt* とつけられた本書が、文字通り彼のライフ・ワークと云うにふさわしい内容をそなえているばかりでなく、神学の歴史において彼の宗教論（一七九九年初版）とやらんで屈指の古典として、今日に至るまで記憶されていることは言うまでもない。

しかしながらシュライエルマッハーの信仰論第一版および第二版が神学界全体に及ぼした影響を考える時に、我々は一種の奇妙な感じをいだかざるを得ないのである。すなわち、その第一版は一八二一年から二二年にかけて一度だけ出版されたにとどまるのに対して、第二版は一八三〇年から三一年にかけて刊行せられた後にも数多く印刷がくり返されて今日に及ぶ事実、それは最も良く示されている。後者については一八三五年からシュライエルマッハー全集が刊行された際に、信仰論第三版として第二版が複製されて以後、一九六〇年にマルティン・レデカーが第七版を同じく第二版をもとに校訂したところまで継続している。その間、前者については一度も複製あるいは校訂の試みがなされることがなかったのである。

このような事態は、シュライエルマッハーの信仰論第二版が、晩年の円熟した神学思想をゆたかに示している著作として、多くの人々に評価され読まれてきたことに由来すると考えられる。しかしその点を認めるとしても、例えばメランヒトンの *Locutiones communes* あるいはカルヴァンの *Institutio* の初版が、それ以後の版との比較のなかで重んぜられてきた経過を思いおこすならば、シュライエルマッハーの信仰論第一版は決して公正な取り扱いを受けてきたとは云えないものがある。少くとも第一版が容易に入手がたい事實は、研究者にとつて少からぬ不便さを痛感させてきたと云つて良い。したがつて今日まで殆どすべての信仰論を研究した業績は、第二版をもとにした論議とな

らざるを得なかった。第一版を参照するとしても、それはせいぜい補充の意図でなされるに留っていたのである。第一版および第二版の兩者を十分に比較し関連させた論議は、残念ながら殆ど行われてこなかったのである。

一九八〇年に我々は待望久しかった、シュライエルマッハーの信仰論第一版を手にすることが出来るようになった。これは単なる複製版ではなく、七〇年代前半から新しい企画のもとに進められてきたシュライエルマッハー全集の一環として刊行されたものである。したがつて約一五〇年まえに発行された第一版が、僅かの注がつけられた本文二巻をもつに過ぎなかつたのに比較すれば、このたびのものは索引や文献一覧表も備えられた体裁となっている。

これによつてシュライエルマッハーの信仰論研究をなすに際して、その第一版と第二版とを比較し関連づけ検討することが、容易に行い得るようになった。例えば第一版のもつ独自の内容に注目しつつ、第二版においてシュライエルマッハーの神学思想がさらに円熟味を加えて展開されて行くさまを跡づける研究は、いま新しい強力な刺戟を与えられることになつたのである。加えて信仰論第一版が再び刊行された一九八〇年には、また第二版の原稿の大半が西ベルリンに保存されていた事実が明らかになつた。このことを通して一九八〇年にレデカーが第二版の校訂を行った当時には、その事実を知らなかつたため、彼はそれを参照し得なかつたことが判明した。こうした事実もまた、信仰論の研究をさらに刺戟する要因となるものと思われる。

以上のようなシュライエルマッハーの信仰論をめぐる研究の状況を考慮しつつ、筆者はここにその第一版および第二版を関連させつつ、学び見出し得たところをまとめて見たいと考える。始めに信仰論の成立をめぐる考察し、ついでその構成について論じてみたいと思う。最後に信仰論の内容に関してふれたいと考える者である。

二 信仰論の成立をめぐる

シュライエルマッハーの再度にわたる信仰論の出版には、その背後に彼がハルレおよびベルリンの両大学において行った講義が存在していた。それらは通算一三回に及ぶものであるが、いま煩雑さをいとわず列挙すると以下のようになる。すなわちハルレ大学においては一八〇四―五年 冬学期および一八〇五―六年 夏学期に行われている。またベルリン大学においては、一八一一年 夏学期、一八一二年―一三年 冬学期、一八一六年 夏学期、一八一八年 夏学期、一八一八―一九年 冬学期、一八二〇―二一年 冬学期、一八二二年 夏学期、一八二三―二四年 冬学期、一八二五年 夏学期、一八二七―二八年 冬学期、一八三〇年 冬学期にそれぞれ講義がなされている。この点に関してはレデカーが一九六〇年に信仰論第二版を校訂した際に、それらの事実をすでに報告していた。³さらに一九八〇年に第一版の校訂本を刊行したバイターは、こうした材料を改めて当時のハルレおよびベルリン大学の講義要覧によつて検討した。⁴その結果もまたレデカーのそれと一致しているのである。したがつてシュライエルマッハーが神学教授として活動した期間に、合計一三回の講義を行ったことは、こんにち疑い得ないと云える。

しかしながら、これらの講義にあつてシュライエルマッハーが準備に使用したノート類は残されていない。こんにち我々が手にし得るのは、他の人々によつて筆記された講義ノートに限られているのである。すなわち

- (a) アウグスト・トヴェステンによる一八一一年夏学期の講義ノート
 - (b) ルードヴィヒ・アウグスト・ヘーゲヴァルトによる一八二三―二四年冬学期の講義ノート
 - (c) モリッツ・ピンダーによる一八二三―二四年冬学期の講義ノート
- の三種のみが現存しているに過ぎない。なお(a)は西ベルリンにあるトヴェステン遺稿類資料のなかに、(b)は東ベルリンに保存されているシュライエルマッハー遺稿類資料のなかにある (Signatur 549)。また(c)は現在西ベルリンにあ

るピンダー遺稿類資料の中にそれぞれ見出される。こうした事実を見るならば、こんにち我々はごく僅かな講義ノートしか持っていないことが明らかとなる。しかもそれらはシュライエルマッハー自身のものではない以上、信仰論の成立をさぐる鍵を提供するとは到底考えるわけには行かない。にも拘らずシュライエルマッハーが行つた講義が、彼が信仰論を書物として出版することを可能にする最も確かな材料となつていふことを、我々は否定する理由をもたないのである。ただこのような事態が生じなければならなかつた点に関して、我々としては次の事柄を理解しておく必要があると思われる。すなわちシュライエルマッハーは講義にあつては、事前に準備したノートやメモをもとに話さないのが常であり、しかもその場で新しいアイデアが多く生じてくるタイプの思想家であつた。したがつて講義の要点を書き記す場合にも、当然その殆どが講義のあとでシュライエルマッハーが筆をとり、まとめたことが考えられて然るべきである。彼自身もそれを一八一八年五月一日に友人ガスにあてた書筒の中で認め、「今日まで私はなお、講義のあとに本当に整理して書くことを常としている」と述べている。⁵これはむしろ、彼が言葉によつて語る能力抜群の人であつたことを物語っているばかりでなく、シュライエルマッハーの人柄を示す事実として記憶されて良いと思われる。

さてこれまで述べてきた諸事実を考慮に入れるならば、信仰論の成立をめぐる我々の考察は、むしろシュライエルマッハーが遺した材料によるのが賢明であると思われる。その際に考えられるのが、シュライエルマッハー自身が記した書簡や日記類である。それらによつて我々は、こんにち信仰論の成立に關して必要な概略の知識を得ることが可能になつていふ。いまそれを報告するにあつて、当然、第一版と第二版の場合とでは事情を異にしているので、それぞれ順次に別箇に取り上げることが了して頂きたいと思ふ。

信仰論の第一版を校訂したバイターは、一九八〇年にこれを公刊するにあたって、シュライエルマツハーが教義学の著作を表わす意図をもち、下書きを作成し始め、印刷に手渡す経過を明らかにしている。その際に彼もまたシュライエルマツハーの書簡および日記類にもとづいて敘述を行っている。バイターが調査し発見した事実は、たしかに注目に値するものと云つて良い。一九六〇年にレデカーが第二版の校訂を行った際には、一八〇〇年より信仰論第一版刊行の一八二一年にいたる期間は、シュライエルマツハーの思想形成を跡づける決定的な材料が不足していると指摘したにとどまっていたのである。これを想起するならば、バイターによる報告が、これまでの空白を補充する役割りを果たしていることは疑い得ないであろう。

いま慈にバイターが明らかにした、信仰論第一版成立までの経過を要約してみたい。第一にシュライエルマツハーは一八〇四年にハルレ大学に於て講義を始めた時すでに教義学の概説書をあらわす気持を持つていたが、一八一二年秋に至つて始めて、パラグラフ毎に組立てられた下書きを準備していたことが確認できるのである。第二に一八一七年から一八八年の書簡には、シュライエルマツハーが友人たちに信仰論のノートを示して意見を求めていたことが明らかにになった。しかしこのノートは残念ながら現存していないのである。第三にシュライエルマツハーが正式に信仰論の執筆にとりかかったのは、一八一八年一月と推定し得ることである。それは一八一八年冬から一九年春にかけて記された三通の書簡をもとに、またその誕生日が一月二日である点を考慮して出された結論である。以下、一八二一年から二二年にかけて、書店への原稿の手渡し、最初の校正刷の到着、序文の執筆、書店よりの第一巻送付などが、シュライエルマツハーの日記類を主なり所として報告されている。これらはかなり詳細にわたつていますが、いまは省略させて頂くことにする。むしろ我々はここで信仰論第二版の成立に目を転じたいと思うのである。

第二版の成立に関しては、我々は現在その作業が進められているシュライエルマツハー全集校訂のなかで、更に詳細に知り得ることを期待して然るべきである。その際には当然、信仰論第二版の新たな校訂と併せて、書簡や日記類も参照することが可能になるからである。しかしながら、これまで我々が保持する材料のみによつても、第二版の成立について概略の事柄は明らかにしている。第一にシュライエルマツハーは一八二九年一月には信仰論第二版の第一部を年内に書き終える期待を表明している。その際に彼は第一版の基本線を維持しながらも、どのパラグラフも新しく書き直していると語っているのである。さらに一八三〇年四月にはシュライエルマツハーは、信仰論第二部を夏の間に書き終えることが極めて難しいと述べている。これらによつて我々は彼が第二版の出版（すなわち第一巻 一八三〇年、第二巻 一八三一年）までに要した時日は、第一巻の時に比較してより短かかったと推定し得るのである。ただこの点を最終的に確認するためには、我々は更に充分な材料がそろふまで待つこととしたい。第二にシュライエルマツハーが一八二九年に発表した、リュツケにあてた二通の書簡は、今日も信仰論執筆の意図を明白に物語る点で、第二版の成立に関して依然として重要な材料である。そこには当時、シュライエルマツハーが信仰論への異論や批判に対して、弁明と配慮とを表明した約一〇名に及ぶ神学者の名前が浮びあがるからである。更に第三にはこのたび第一版の校訂がなされた際に、シュライエルマツハー自身が第一版（ただし第一巻のみ現存）を手許で所蔵しており、そこには欄外の書き込みが残されていることが、改めて確認されたことである。この書き込みは近い将来、公表されることになっており、目下その仕業が進行中である。したがって我々がこれに目を通し得る日の近いことを楽しみに待ちたいと思う。

三 信仰論の構成について

我々がシュライエルマツハーの信仰論 第一版および第二版を手にする時に、直ちにそのいずれもが番号によつて配列された構成をもつてことに気づかされる。すなわち第一版は一九〇の、第二版は一七一のパラグラフから成っている。しかも、それらの全てにわたつて、冒頭に内容を要約した短い文章が置かれている形式をとっている。

この事實は信仰論の構成を考えるにあつて、第一版および第二版の各パラグラフの内容を要約した短文「einsatz」を比較し対照する作業が行われる結果になつた。もとより内容の要約に過ぎない文章の比較が、第一版と第二版との構成の異同すべてを、直ちに明らかにし得るものではない。にも拘らずそれは、便利さの点では最も多く用いられるものであつた。また「einsatz」の対照表は、今日まで二度にわたつて複製され利用されてきた。すなわちラーデ（一九〇四年）によるものと、レデカー（一九六〇年）によるものがそれである。¹⁷⁾

慈で我々としては、こうした対照表を更めて取り上げる必要はないと思う。むしろ信仰論の構成を全体にわたつて概観するために、必要な範囲での図式化を行い、第一版および第二版の構成における比較を独自に行ふこととしたい。信仰論全体の構成に関しては、第一版と第二版の間とくに指摘すべき問題を、我々としては見出し得ない。シュライエルマツハーはいずれの場合にも、序論を先ずしるした後に、本論を第一部と第二部に分けて組み立てる構成を採用している。それらの内容に関しては後述するが、序論、第一部、第二部の組合せをパラグラフ数によつて比較すると、第一版、第二版を通して類似の分量になつてゐる事實が明らかになる。また第二版については、いずれの版も罪と恩寵との意識の展開を扱う二つの段落に分けられており、結局、この第二版が最も大きくなつてゐる点も共通である。これらを図示すると左の如しなる。

第一版	—	第二版	—
§ 一一九〇	—	§ 一一七一	—
序論	—	序論	—
§ 一一三五	—	§ 一一三一	—
第一部	—	第一部	—
§ 三六七七	—	§ 三二六一	—
第二部	—	第二部	—
§ 七八一九〇	—	§ 六二一七一	—

構成上の相違が見出せるのは、序論のなかにおいてである点を、慈でわれわれは指摘せねばならない。シュライエルマツハーは信仰論一版では、序論のなかを細分化することは格別おこなつていない。しかし第二版においては、幾つかのパラグラフを一括して表題を付している。したがつて第二版に使用された表題を整理上の手掛りとして見たいと思う。その結果、先ず第一版にあつては冒頭に登場するのは、第二版の§ 一五一—一九（「教義学のキリスト教的敬虔に対する関係」と表題がつけられている）に対応する段落であることが判明する。しかしこれ以外の段落においては、第一版と第二版のあいだには、これと云つた構成上の違いは見出されない。いま上述の結果を以下のような図にまとめて示したい。¹⁸⁾

第一版 序論	—	第二版 序論	—
教義学のキリスト教的敬虔に対する関係	—	§ 一五一—一九	—
§ 一一五	—		—

シュライエルマツハーの信仰論第一版および第二版について（高森）

解題あるいは入門	—
§ 六一七	§ 一一二
教会の概念 倫理学よりの借用命題	—
§ 八一—二	§ 三一六
敬虔共同体の全般的相異について	—
宗教哲学よりの借用命題	§ 七一〇
§ 一三一—七	—
キリスト教の本質に基づく敘述	—
弁証学よりの借用命題	§ 一一—二四
§ 一八一—二二	—
教義学の方法について	§ 二〇—三一
§ 二三一—三五	—
(左記に更に分化されているので併せて記す)	—
教義学的資料の選択について	§ 二一—二六
§ 二四—二九・三二—	—
教義学の形成について	§ 二七—三一
§ 三〇—三一	—
§ 三三—三五	—

次に信仰の本論について、第一版と第二版における構成を検討してみたい。周知のごとくシュライエルマツハーは信仰論の第一部において敬虔自己意識それ自体を扱い、続く第二部においては敬虔自己意識の、罪と恩寵との対立による展開を二つの段落に細分して扱っている。併せて彼は信仰論が提示する命題を、人間の生の状態の記述、神の属性と行為様式の概念、世界の状態についての表現という三形態において展開し得ると考える。こうした構想はすでに第一版において確立しており、第二版へと引き継がれているものである。第一版と第二版においてシュライエルマツハーが、本論の構成を示すために記した表題の文章は、詳細に見れば異なる箇所はあるが、基本的に大きな違いはない。したがってここでは第二版の表題を整理の手掛りとして使用する。その結果、以下の如く第一版と第二版を比較することが出来る。

第一版 本論	—	第二版 本論	—
I 敬虔自己意識それ自体	—	—	—
序	—	—	—
§ 三六一—四二	—	§ 三二—三五	—
1 敬虔自己意識の記述	—	—	—
§ 四三—六三	—	§ 三六一—四九	—
2 対応する神の属性	—	—	—
シュライエルマツハーの信仰論第一版および第二版について(高森)	—	—	—

§ 六四—六九	—	§ 五〇—五六
3 対応する世界の状態		
§ 七〇—七六 ²⁰⁾	—	§ 五六—六一
II 敬虔自己意識の対立による規定		
序		
§ 七八—八三	—	§ 六二—六四
A 罪の意識の展開		
序		
§ 八四—八五	—	§ 六五
1 人間の状態としての罪		
§ 八六—九六	—	§ 六六—七四
2 対応する世界の状態		
§ 九七—一〇〇	—	§ 七五—七八
3 対応する神の属性		
§ 一〇一—一〇六	—	§ 七九—八五
B 恩寵の意識の展開		
序		

§ 一〇七—一一一	—	§ 八六—九〇
1 恩寵の意識としてのキリスト者の状態		
§ 一二二—一三二	—	§ 九一—一二二
2 対応する世界の状態		
§ 一三三—一七九	—	§ 一二三—一六三
3 対応する神の属性		
§ 一八〇—一八五	—	§ 一六四—一六九
結論 神の三位一体について		
§ 一八六—一九〇	—	§ 一七〇—一七二

これまでの結果をまとめて見ると、我々にはシュライエルマツハーが、信仰論の構成に関しては、すでに第一版において安定した形のを提示していることを見出した。したがって第二版はそれを受け継いで若干の改訂を加えたに留まるのである。

ここで我々は更に、信仰論の第一版と第二版について、それらの内容に関する若干の考察へ進みたいと思う。

四 信仰論の内容に関して

始めに信仰論の内容を取り扱うに際して、我々は慈で若干の限定をせざるを得ないことを表明せねばならない。信

シュライエルマツハーの信仰論第一版および第二版について(高森)

仰論の内容を全般的に取り上げる課題は、云うまでもなく膨大な仕事を必要とする。のみならず視点や方法の如何によつて、それは予想しがたい混乱におちいる可能性なしとしない。したがつて我々としてはシュライエルマツハーの信仰論第一版および第二版の内容を取り上げるにあつては、極めて基本的とも云える事柄のみに限定して述べてみたいと考える。

第一にシュライエルマツハーが信仰論を執筆するにあつて、古代教父、中世そして宗教改革の神学に加えて、正統主義および啓蒙主義時代の神学を参照したり、或いは批判している点である。また彼が同時代の神学者と対決しながら、その論議を進めていることは言うまでもない。それらの神学史における少なからぬ諸材料には、信仰論の第一版および第二版において如何なるものが用いられているであろうか。それはシュライエルマツハー自身の神学思想が形成されて行く経過を知るには不可欠の背景となるものである。²¹⁾

第二に信仰論の第一版および第二版において、各パラグラフの敘述形式がどの様に変化しているかを明らかにすることである。さきに我々は信仰論の構成について考察し、シュライエルマツハーが信仰論の第一版において示したものは、第二版にも基本的には変更されずに引き継がれている事実を見出した。信仰論の構成に関しては、我々にはさして大きな相違が見出されなかつたのである。しかしながら第一版および第二版の敘述形式を、各パラグラフにわたつて綿密に検討するときに、我々は両者のあいだに相違が少なからず存することを発見する。それは文字通り構成上の類似点と対照的なものである。そうした点を明らかにしておくことは、信仰論の第一版、第二版それぞれの特色を明らかにする場合の基礎ともなり得るであろう。加えて行くシュライエルマツハーの神学の展開を知るよすがとなると思われる。

では始めにシュライエルマツハーが信仰論において言及した神学史上の諸材料に注目して見たい。それらの諸材料は信仰論の原文校訂作業が行われる中で見出され、それと共にシュライエルマツハーが彼に先立つ神学諸潮流との接衝を展開してきた模様が明らかにされてきたのは言うまでもない。しかし今日まで、この点に関する包括的な研究は報告されないままであつた。それは第一版の校訂が長くなされなかつた事情によるものと思われる。したがつて側面からの補強材料として、シュライエルマツハーの蔵書目録(一八三五年)を利用する方法がとられてきたのである。²²⁾

信仰論第一版の校訂版がこのたび出版された際に、併せてシュライエルマツハーが敘述にあつて言及している諸材料が、一括してまとめられ公けにされたことは、評価すべき貢献であつた。²³⁾ この仕事を擔当したメッケンシュトック(キール大学シュライエルマツハー研究所)の労を多としなければならぬ。

以下に述べるところは、シュライエルマツハーが言及している神学者の主なるものについてである。これを調べるにあつて、第一版については一九八〇年の校訂版、第二版については一九六〇年の校訂版につけられた索引を利用していることを付記したい。²⁴⁾

(一)シュライエルマツハーは古代教父について、かなりの言及や引用を行つている。それらのうち比較のおおくふれられているのは、アウグスティヌス、アレキサンドリアのクレメンス、ナツィアンのグレゴリウス、ヒラリウス、ヨハネス、クリソストムス、ダマスコのヨハネス、オリゲネスである。そのうちで特にアウグスティヌスについては、際立つて多くの引用や言及がなされている。すなわち第一版では三一回、第二版では三五回の多数にのぼる。これを他の教父たちと比較するとき、ヒラリウスは第一版で六回、第二版で五回、ダマスコのヨハネスは第一版で七回、第二版で一〇回、オリゲネスは第一版で六回、第二版で四回に留まつている。²⁵⁾ これらを通してシュライエルマツハーは、

古代教会の主要な神学者たちと接衝しながら、その論議を展開していることが明らかとなる。

これに対して我々は中世の神学者については、予想に反して僅かの引用しか見出すことが出来ないのである。すなわち、アンセルムスは第一版、第二版ともに四回がもつとも多く、トマス・アクイナスは第一回で一回、第二版で二回を数えるに過ぎない。そのほかでは聖ヴィクトールのフーゴーがいずれの版にも二回登場する。さらにクレルボールのベルナルトおよびニコラウスのリラが、それぞれ第一版、第二版ともに一回づつ引用されるに留まっているのである。古代教父とりわけアウグスティヌスに見られる数多くの引用とは、全く対照的な結果となっている。

(二) シュライエルマツハーは宗教改革の神学について、均勢のとれた言及や引用を行っている。近代プロテスタントイイズムの神学者として、それは当然のことと云えるであろう。ルターは第一版で一九回、第二版で一八回、メラントンは第一版では二二回、第二版では一七回の引用あるは言及が見られる。またツヴィングリについては第一版で八回、第二版で六回、さらにカルヴァンは第一版において一九回、第二版において一七回にわたってふれられているのである。

(三) プロテスタント正統主義の神学者について、シュライエルマツハーが引用もしくは言及している点に関して、我々は次の事実を見出し得る。すなわち信仰論に登場するのは、ゲルハルトおよびクエンシユテツドの兩名に集中しているのである。慈で我々は他の神学者からの僅かな引用も含めて、それら殆どすべてがルター派正統主義の神学者であることを記憶してよいであろう。シュライエルマツハーは一八一一年五月一日に友人がガスにあてた書簡において、ゲルハルトとクエンシユテツドの神学体系と接衝してきたことを明らかにしている。²⁶ こうした背景が信仰論における多数の引用あるは言及となつたと考えられるのである。さてゲルハルトについては第一版で二七回、第二版で

一二回ふれられ、クエンシユテツドについては第一版において一五回、第二版において六回の引用や言及が行われている。いずれも第二版において減少しているのは、シュライエルマツハー自身による正統主義神学の克服を側面から示す例となると考える。

四最後に啓蒙主義神学およびシュライエルマツハーと同時代の一九世紀始め頃の神学については、どの様な引用や言及がなされているであろうか。それらはシュライエルマツハーにとつて最も身近であり、かつ折衝の度合がより直接的であつたことは申すまでもない。ただし慈では、特に目立つて多くの回数にわたっているものに限定して述べることにする。

啓蒙主義神学者については、バウムガルテンとゼムラーの両者が注目されてよいと思われる。第一版では前者については一〇回、後者については四回の引用が行われている。しかし第二版では、バウムガルテンは僅かに一回登場するのみで、ゼムラーは姿を消しているのである。このような急激な引用の減少は、これまで叙述してきたなかにも類例がない程のものである。それはシュライエルマツハー自身の神学が形成され円熟して行くと共に、啓蒙主義神学が克服され意識されなくなる経過を物語るように思われる。

シュライエルマツハーはまた彼と同時代の神学者と討論を行いながら、信仰論の論述を展開している。そのなかで引用や言及の回数で目立つのは、ヴェークシユナイダー J.A.L. Wegscheider (一七七一—一八四九年)、プレッチシユナイダー K.G. Bretschneider (一七七六—一八四八年)、そしてラインハルト F.V. Reinhard (一七五三—一八二二年)の三名である。いま第一版における引用の回数に限定して報告するならば、ヴェークシユナイダー三回、プレッチシユナイダー七回、ラインハルト二六回となっている。これに対して第二版においては、ラインハルトのみは二一回に及

ぶが、他の二名はいずれも一回に留まっている。ここでも急激な減少が見られることは注目して良いであろう。²⁸ 中には一方でラインハルトは聖書の弁証的な超自然主義の立場にたつ神学者であり、シュライエルマツハーが信仰論の第一版、第二版を通じて批判の戈先をゆるめなかったことが考えられてよい。また他方ではヴェークシュナイダー、ブレッチシュナイダーの両名は合理主義の色彩をもつ立場にたっており、シュライエルマツハーが第二版において引用の必要をあまり感じなかつたように思われる。

つぎに我々はシュライエルマツハーが、信仰論の第一版および第二版において、どの様な敘述形式を採用しているかを検討してみたい。すでに指摘した如く、われわれは慈で第一版と第二版のあいだに少からぬ相違点を見出すことが出来るのである。

シュライエルマツハーが信仰論を敘述するに際して、いずれの版においてもパラグラフごとに通し番号を付していることは、すでにふれた通りである。また内容全体を要約した短文 *Leitatz* に続いて、ひとつのパラグラフの中を幾つかの小段落に分け、それらにも番号を付けて整理する手法が、いずれの版においても採用されている。

これとは対照的に第一版と第二版との相違は、シュライエルマツハーが各パラグラフの導入部分で行っている敘述の形式の場合に先ず表われる。すなわち第一版においてシュライエルマツハーは、論述の始めにあつて内容に関係ふかい旧新約聖書の箇所をあげ、併せて教父に始まる神学者の見解にふれ、さらに彼が属していた改革派の信条のみならずルター派教会の諸信条について吟味を行つている。これに対して第二版では第一版で提示した材料については格別あたらしいものを加えず、それらを整理し、手直しを行つたという印象を持つ。²⁹ むしろ第二版においては、シュ

ライエルマツハーのより円熟した神学的思索のあとが、豊かに展開されると云うのが適切であろう。この意味では第一版のほうが、教義学概論の教科書に則した敘述の形をとつている。逆に云えばシュライエルマツハーは第二版において、各パラグラフの内容をより神学的に深める努力をかさねているのである。

次にシュライエルマツハーの信仰論においては、第一版と第二版の間に見られる敘述形式上の相違点として、注 *Anmerkung* の存在を忘れるわけには行かない。そして我々はここに第一版と第二版の相違点としては最も目立つ、敘述形式上の問題を指摘することが出来るのである。のみならず我々はこれらの注を第一版と第二版について検討した結果、後述する如き興味ある結論に到達するのである。

いま慈で注意を喚起している注とは、信仰論のパラグラフにおいて、内容全体を要約した短文 *Leitatz* が冒頭に記された直後に、シュライエルマツハーが書き加えているものである。彼はこれらの注を記した後に、1、2、3といった番号を付した小段落に従つて、本文の敘述を展開する方式を採用している。またこれらの注の内容は、当該パラグラフに登場する概念の定義、解釈、説明などが書きのこされ、まとめられているものである。場合によつては、a, b, c と分けて項目別に述べられているところもある。全体的にそれらは一見まことに地味な存在であつて、目立たぬ外観を呈している。しかし我々はそれらを検討した結果、注目に値する事実を見立し得たと考えるものである。

シュライエルマツハーが信仰論において、これらの注を書き加えている回数を報告しておきたい。第一版、第二版の双方について調べたところ、先ず第一版においては、序論に二一回、本論第一部に二一回、第二部に三七回、あわせて七九回の多きに達している。これに対して第二版では序論に一〇回、本論第一部では六回、第二部で二七回、合計四三回と目立つた減少を示している。ただしこれらの回数の中には、シュライエルマツハーがいずれの版において

部においては二七回のうち二六回は、注の字なしに主としてプロテスタント諸信条よりの材料が整理されて記入されているのである。したがって、我々が先に述べたように、注を当該パラグラフに登場する概念の定義、解釈、説明と見なすならば、第二版においては第一版の場合と比較して、注は非常な減少を示していると結論する外はない。換言すれば第一版はその敘述形式上の特色を、シュライエルマツハーが自ら書きのこした注において示していると云えるのである。本論文の末尾に付属資料として、それらの注が登場する箇所をまとめておいたので参照して頂きたいと思う。それでは信仰論の第一版と第二版において、注は如何なる機能をもっているであろう。その登場回数は第二版においては減少しており、しかも第二版ではむしろプロテスタント諸信条よりの材料によって内容の大部分が占められているのを見出した。これらの事実から考え合せて、我々はシュライエルマツハーが信仰論の注において、彼自身による伝統的教義との折衝を出発させる場所を見出していると考えられるものである。第一版には、第二版にくらべて格段に多い回数注が登場してくるという事実も、この意味において理解できるであろう。そしてシュライエルマツハーの円熟した神学がより鮮やかに展開される第二版においては、彼自身はむしろ本文の論述のなかに伝統的教義を解釈し取り込んで行くことを行ったと思われる。さきに我々が検討してみた神学史上の諸潮流をシュライエルマツハーが信仰論において如何に参照しているかの問題の場合と、或る意味では類似した結論に到達したことは興味ぶかいことであると考える。

それにしても、これまで優れたシュライエルマツハー研究者によつて、信仰論の第一版により基本的な形で神学がまとめられているとして、第二版と並んで考慮されるべきことが指摘された例はあつた。しかしながら種々の事情の

こに報告した小さな事実も、今後の研究への足がかりとして役立つならば幸いである。

五 結 論

われわれはシュライエルマツハーのライフ・ワークとも云うべき信仰論の第一版と第二版について、最新の研究が明らかにした諸材料を参照しつつ考察を行つてきた。このたびはとくに信仰論の成立、構成、内容に関連して、今日まで未知の状態に放置されていた事実を見出し指摘するように努めた。もちろん、それらは今後さらに徹底した研究の進展に期待すべきところが多い。少くともそうした事態へ向けてのひとつのステップとして、本論文で提起された材料が受けとめられ利用されることを願うものである。

いま簡単に結論をまとめることを見てみたい。第一に我々は、シュライエルマツハーの信仰論第一版および第二版の双方を相互に関連させて考察する研究課題に、八〇年代に入つて始めて本格的に取り組み得るようになったことを明らかにした。シュライエルマツハーの没後一五〇年をへた今日、この課題に新しく関心がむけられようとしている。信仰論のふたつの版がシュライエルマツハーの神学形成を雄弁に物語る不可欠の古典として、おなじ比重をもつて考慮され、相互の関連が明らかにされて行く仕事が、いま正に開始されたと言ふべきである。

これに関連して第二に、我々はシュライエルマツハーが信仰論の構成については、すでに第一版において骨格となるものを作り出しているのを見出した。これに対して内容とりわけ敘述形式に関して、神学者の引用や言及、伝統

的教義との折衝が端的に見られる注を検討した結果、ふたつの版にはかなりの相違があることを見出したのである。こうした相違点が明確にされることを通して、シュライエルマツハーの形成や内容が、これまで以上の密度をもつて探究され得るであろう。

最後にこうした課題の追求は、シュライエルマツハーの、カント、ヘーゲルを始めとする同時代の思想家との折衝を明らかにする基本的な材料を提供することにつながる点を指摘しておきたい。本論文においては敢て觸れなかったが、同時代の思想家との折衝の度合云々は、シュライエルマツハー研究における古くして新しき課題である。これが今日あらたなる進展をとげ得るためには、学際的な研究の交流や刺戟は欠かせない。そのなかにおける神学分野を擔当する研究者が果たすべき役割は、きわめて大きなものが期待されているのである。

注

- (1) Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, *Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt* (1821/22), hrsg. von H. Peifer (Kritische Gesamtausgabe, 1. Abteilung, Bd. 7, Teilband 1&2, Berlin, 1980) など、シュライエルマツハーによる欄外書込みを収録した Teilband 3 は、現在作業継続中である。(CG¹と略記した)
- (2) Aus dem Archiv des Verlages Walter de Gruyter, Brief Urkunden Dokumente bearbeitet von D. Fouquet – Plumacher und M. Wolter, Berlin, 1980, S. 103–127, bes. S. 111 を参照することとした。
- (3) Friedrich Schleiermacher, *Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt*, 7. Auflage, Berlin, 1960, Bd. 1, 1960, Bd. 1, XV–XX 参照。(CG²と略記)
- (4) CG¹ I, S. XVI を参照された。
- (5) CG² II, S. 395 参照。なお CG¹ I, S. XVII を比較された。
- (6) Fr. Schleiermacher, *Briefwechsel mit J. Chr. Ga B.*

- (7) シュライエルマツハーの書簡は、校訂の面で不満足なものがあつた。Aus Schleiermachers *Leben in Briefen*, hrsg. von L. Jonas and W. Dilthey, 4 Bde, Berlin, 1858–1863 (1974 複製版) は最も包括的であるが、現在は、編集が進められているシュライエルマツハー全集のなかで、書簡集が含まれており、近き将来に刊行が期待されている。また日記類については、東スリンに保管されているシュライエルマツハー遺稿類資料のなかで、一八〇八—一一年および一八二〇—一八年までの日記、一八二八—一三〇年および一八三二—一三四年までの家計簿が存在することが判明している。これらも今後の全集刊行が進むなかで公表されるのを期待せざるを得ない。なお CG¹ I, S. XXXIX Anm. 82 を参照された。
- (8) CG¹ I, S. XX – XXXV の敘述を参き、この項とした。なお CG¹ S. XXXIV は、示された年表入りの要約、シュライエルマツハーの調査結果を示すもので、この項には採りあげない。
- (9) CG² I, S. XXI 参照。
- (10) CG¹ I, S. XXII, 及び S. XXX II Anm. 37 など。
- (11) CG¹ I, S. XX II, 及び Anm. 42 に採りあげた。
- (12) Fr. Schleiermacher, *Briefwechsel mit J. Chr. Ga B.*, Berlin, 1852, S. 219f. など、Schleiermacher als Mensch, Sein Wirken, Familien- und Freundesbriefe 1804 bis

- (13) 前掲書 Schleiermacher als Mensch, hrsg. von H. Meisner, S. 357 参照。
- (14) Schleiermachers *Sendschriften über seine Glaubenslehre an Lücke*, hrsg. von H. Mulert, Gießen, 1908, 124 頁。
- (15) CG¹ I, S. XXV II を参照された。なおシュライエルマツハーが手許に所蔵していた第一版(第一巻のみ)は、東スリンに保管されている (Signatur 61)。なお (CG¹ I, S. XIII) を比較された。
- (16) なお第一版に対し当時の神学界が如何なる反応を示したかは、ハイターによる敘述が詳細に報告している。CG¹ I, S. XXXV – LV III を参照することとした。
- (17) M. Rade (hrsg.), *Die Leitsätze der 1. und 2. Auflage von Schleiermachers Glaubenslehre nebeneinandergestellt*, Tübingen, 1904 (Frankfurt a. M. 1968) など、CG² II, S. 497 – 563, Berlin, 1960 を参照された。
- (18) なおシュライエルマツハーは第二版で、一八一—一九二の「教義学の説明」という表題を用いたが、この項では表示の都合上、割愛した。
- (19) 信仰論の構成に關して、拙稿「シュライエルマツハーにおける『神学と哲学』」(神学研究第二六号、一九七八年、一六一—一九頁の敘述を参き、この項とした。

- (20) 第一版のバラグラフ七七は、§六八が重複したため欠けているので記入していない。
- (21) もちろんシュライエルマツハーの神学形成を理解するためには、さらに今ひとつ、同時代の哲学思想との折衝を明らかにする課題がある。とりわけカント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲルの思想との関わりは重要である。この様に精神的な流れの中でシュライエルマツハーの神学思想がもつ特色を明らかにして行くことは、その必要性を今日あらためて強調されるべきである。
- (22) *Tabulae librorum e bibliotheca defuncti Schleiermacher*, Berlin, 1835. この蔵書口録は三六五五冊に及ぶ書籍類のリストを記載している。現在、大英博物館の図書館の図書館部門である British Library に保存されている。なお、拙稿、シュライエルマツハーにおける「神学と哲学」(一)、神学研究 第二四号、一九七六年、六四—八四頁、とくに七〇—七九—八〇頁を参照して頂きたい。
- (23) CG¹ II, S. 385—398 に収録されている。
- (24) CG¹ II, S. 339—402 および CG² II, S. 564—565 参照。
- (25) その他の教父については、アレキサンドリアのクレメンスは第一版で三回、第二版で二回、ナツイアソツのグレゴリウスは第一版で二回、第二版で一回、ヨハネス・クリンストムスはいずれの版も二回である。なお第一版にのみ登場するのがニッサのグレゴリウス、第二版のみはデイオニ

- シウス・アレオバギタであり、両者とも一回づつ引用されている。
- (26) ゲルハルト・クエンシュテツドの兩名以外には、ブツデウス、カロヴィス・ホラーツ、ムサエウスからの引用が、二回散見されるに過ぎない。そのうちブツデウス以外の三名は、第二版では姿を消している。
- (27) *Schleiermacher als Mensch. Sein Wirken. Familien- und Freundschaftsbriefe, 1804 bis 1834*, hg. von H. Meisner, Gotha, 1923, S. 134 参照。
- (28) 第二版における引用の減少については、シュライエルマツハーがリュツケにあてた二通の書簡(一八二九年)において、それらの神学者に言及している事情が考えられてよい。なお同書簡については注(4)を参照して頂きたい。
- (29) ちなみに旧新約聖書からの引用回数については、CG¹ II, S. 403—409 および CG² II, S. 566—571 の索引によつて調べたところ次の結果を得た。すなわち第一版では旧約四一回、新約六一八回となり、第二版では旧約四五回、新約五〇〇回となった。
- (30) たゞえは H. Scholz, *Christentum und Wissenschaft in Schleiermachers Glaubenslehre*, Leipzig, 1911, S. 9 を参照して頂きたい。今世紀始め頃の、いわゆるシュライエルマツハー・ルネサンスのなかで活動したシヨルツの洞察は、今日あらためて評価されるべき内容をもっていると言える。

参考文献

- シュライエルマンハー著作関係
- Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt (1821/22), hg. von H. Peiter (Kritische Gesamtausgabe I, Abteilung, Bd. 7, Teilband 1&2, Berlin, 1980 (CG¹ Ⅴ 附記))
- Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt hg. von M. Redeker 7. Auflage, Berlin, 1960 Bd. 1&2 (CG² Ⅴ 附記)
- M. Rade (hg.), Die Leitsätze der 1. und 2. Auflage von Schleiermachers Glaubenslehre nebeneinandergestellt, Tübingen, 1904 (Frankfurt a. M. 1968 複製版)
- Schleiermachers Sendschreiben über seine Glaubenslehre an Lücke, hg. von H. Mulert, Gießen, 1908
- Tabulae librorum e bibliotheca defuncti Schleiermacher, Berlin, 1835
- Aus Schleiermachers Leben in Briefen, hg. von L. Jonas und W. Dilthey, 4 Bde, Berlin, 1858—1863 (1974 複製版)
- Briefwechsel mit J. Chr. Gaß, Berlin, 1852
- Schleiermacher als Mensch. Sein Wirken. Familien- und Freundschaftsbriefe 1804 bis 1834, hg. von H. Meisner, Gotha, 1923

この機会に信仰論関係の研究書および雑誌論文を付記したい。

シュライエルマンハーの信仰論第一版および第二版について(高森)

- ただし重複をさけるために拙稿、シュライエルマツハーにおける「神学と哲学」(一)、神学研究 第二六号、一九七八年、三〇—三二頁に掲載したものを省略し、それ以後の発表されたものを一九八二年一月の時点に可能な限り収録した。
- Th. H. Jørgensen, *Das religionsphilosophische Offenbarungsverständnis des späteren Schleiermacher*, Tübingen, 1977
- R. R. Williams, *Schleiermacher the Theologian. The Construction of the Doctrine of God*, Philadelphia, 1978
- E. Lessing, *Zu Schleiermachers Verständnis der Trinitätslehre*, ZThK 76(1979), S. 450—488
- P. D. L. Avis, *Friedrich Schleiermacher and the Science of Theology*, SJTh 32(1979), S. 19—43
- E. Schrófer, *Theologie als positive Wissenschaft. Prinzipien und Methoden der Dogmatik bei Schleiermacher*, Frankfurt a. M., 1980
- W. Gráb, *Humanität und Christentums-geschichte. Eine Untersuchung zum Geschichtsbegriff in Spätwerk Schleiermachers*, Göttingen, 1980
- R. Crowter, *Rhetoric and Substance in Schleiermachers Revision of The Christian Faith (1821—1822)*, JR 19(1980), S. 285—306

付属資料

以下に記した算用数字は、シュライエルマツハーが書き加えた注が登場するバラグラフを示す。なお注の字が無い場合には、

当該数字の右肩に印を付した。

一七一

九二

第一版

序論

一、二、六、八、一〇、一二、一五、一六、一八、一九、
二〇、二二、二三、二四、二五、二六、二八、二九、
三〇、三一、三四

第一部

三六、三七、四〇、四八、五一、五二、五三、五五、
五九、六二、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、
七二、七三、七四、七五、七六

第二部

七九、八〇、八三、八六、八八、九一、九五、九七、
九九、一〇三、一〇四、一〇六、一〇七、一〇四、
一七、一一八、一一九、一二四、一二五、一二六、
二八、一二九、一三〇、一三一、一三三、一三六、
三七、一三九、一四〇、一四二、一四五、一四七、
一五〇、一六二、一七三、一七八、一八四

第二版

序論

二、三、四、一〇、一六、一九、二五、二六、二八、
二九

第一部

三三、三六、三七、三八、四〇、四一

六二、七〇、七一、七三、八一、八二、九六、一〇八、
一〇九、一一二、一一九、一二〇、一二〇、一二一、
一三四、一三七、三八、一四〇、一四一、一四二、
一四五、一四七、一五六、一六〇、一六六、一七〇、

右にあげたパラグラフのうちで、互に対応する内容を示しているものを抜き出して見ると、以下のようになる。

第一版

第二版

序論

一 一九
二 一六
三 二二
四 二五
五 二八

六 二二
七 二五
八 二八

九 二八
一〇 三三
一一 三三

一二 三三
一三 三三
一四 三三

一五 三三
一六 三三
一七 三三

一八 三三
一九 三三
二〇 三三

二一 三三
二二 三三
二三 三三

二四 三三
二五 三三
二六 三三

二七 三三
二八 三三
二九 三三

三〇 三三
三一 三三
三二 三三

三三 三三
三四 三三
三五 三三

三六 三三
三七 三三
三八 三三

三九 三三
四〇 三三
四一 三三

四二 三三
四三 三三
四四 三三

四五 三三
四六 三三
四七 三三

四八 三三
四九 三三
五〇 三三

五一 三三
五二 三三
五三 三三

五四 三三
五五 三三
五六 三三

五七 三三
五八 三三
五九 三三

六〇 三三
六一 三三
六二 三三

六三 三三
六四 三三
六五 三三

六六 三三
六七 三三
六八 三三

六九 三三
七〇 三三
七一 三三

七二 三三
七三 三三
七四 三三

七五 三三
七六 三三
七七 三三

七八 三三
七九 三三
八〇 三三

八一 三三
八二 三三
八三 三三

八四 三三
八五 三三
八六 三三

八七 三三
八八 三三
八九 三三

九〇 三三
九一 三三
九二 三三

九三 三三
九四 三三
九五 三三

九六 三三
九七 三三
九八 三三

九九 三三
一〇〇 三三
一〇一 三三

一〇二 三三
一〇三 三三
一〇四 三三

一〇五 三三
一〇六 三三
一〇七 三三

一〇八 三三
一〇九 三三
一一〇 三三

一一一 三三
一一二 三三
一一三 三三

一一四 三三
一一五 三三
一一六 三三

一一七 三三
一一八 三三
一一九 三三

一二〇 三三
一二一 三三
一二二 三三

一二三 三三
一二四 三三
一二五 三三

一二六 三三
一二七 三三
一二八 三三

一二九 三三
一三〇 三三
一三一 三三

一三二 三三
一三三 三三
一三四 三三

一三五 三三
一三六 三三
一三七 三三

一三九 三三
一四〇 三三
一四一 三三

一四二 三三
一四三 三三
一四四 三三

一四五 三三
一四六 三三
一四七 三三

一四八 三三
一四九 三三
一五〇 三三

一五〇
一六二

一三〇
一四五